

古代は神秘の時代だった。人々の願いはエルフ[女神]の形で顕現した。

彼女たちは人々の願いを叶え、その見返りに人々は彼女たちに信仰[愛情]を提供し、力と永遠の命を与えた。

人類がエルフによって大小さまざまな問題を解決していくうちに、さらに多くの願いが集まり、やがて「エルフ」の時代が訪れる。

エルフは基本的に人の願いを叶えてくれる存在だった。

しかし、それが絶対に完璧な存在というわけではなかった。

エルフは信仰を持たない者を虐殺することもありました、

信仰する者に過剰な供物を要求することもありました。

人間の願いを叶える過程で、うまくいかないこともあった。

多くのエルフによって人類は文明を発展させた。

しかし、より簡単に願いを叶える方法を手に入れた人類は

これでエルフが頭痛の種になった。

すると、人間たちはもはやエルフを信仰せず、彼女たちを服従させた。

方法は簡単だった。女神の品位を落とす[お仕置き]、急所であるお尻を叩く[お仕置き]。

そうして時は流れ、エルフは「女神」から「家畜」になった。

人が多く行き交う市役所の廊下。行政室の玄関先には、ある公務員が誰かを待っているかのように時間を見ている。

タッタッタッタッタッタッタ...

小柄な身長だが顔が小さくて可愛らしく、6.5等身の美しいプロポーションを持つ金髪のエルフが、頭と同じくらいの大きな胸とお尻、そして鉄製の首輪を振って半裸で飛び出してくる。

チャラン、チャラン！チャラン、チャラン！チャラン、チャラン

裸に等しい黒のマイクロビキニを着たエルフ。

ここはプールではないが、エルフはそんな服を着なければならない。乳首と陰唇だけを隠し、乳輪と大陰唇まで見える、「服」と呼ぶには恥ずかしい巨乳。

不謹慎な格好をしているにも関わらず、エルフ自身がメイドであることを主張するかのようにメイドのヘッドドレスを頭に被っている。

胸元を全く隠さないフリル付きのトップスと、スカートは省略し、太ももをしっかり押さえた白いストッキングを履いたエルフの姿。

最後に、どんな命令にも従いそうな大きな犬の首輪をつけ、泣きそうな表情のエルフ。

時代は変わっても、エルフは人[男]の願いを叶えてくれる存在だった。

"エルフの女、遅刻か。"

"書類が処理されるまで、お尻を叩かれるのを見るのも楽しそうだな..."

エルフを目当てに大騒ぎする人々。見慣れたおもちゃを見るような光景だ。

エルフは玄関先で待っていた公務員の前で、あわてふためく。

"へっ。へっ..."

その後、目が合うとすぐに後ろを向いてお尻を彼の鼠径部側に突き出す、

お尻を揺らしながらふわふわと名前を書く。

"う...う...う...う..."

彼女のお尻は手のひら跡が残り、パンパンに腫れたまま、来るまでに何十、何百回もお尻を叩かれたように見えた。

"L I A ... 6.1 ... 7 ... 8"

"こんにちは、ご主人様[人間]!? 6178番...エルフ[家畜]です。リアです! 今日は社会奉仕のために来ました!"

ピタッ!

"ヒュッ!"

すでに十分に尻が下がっているにも関わらず、もう一度手で尻を叩きつける公務員。

ふくよかなリアちゃんのお尻の肉が手のひらの摩擦で振動する。

" 現在時刻8時1分。1分遅刻だからお尻100台。

家畜の話題でご主人を待たせる？

"罪...ごめんなさい...。来る途中...。地下鉄で懲らしめられながら..."

カチャッ!ガチャッ!

神経質にお尻を左右に叩きつける

"誰がお前の尻を叩かれたことを話せて言ったんだ?" 口答えで50人追加。

家畜らしく尻を出せ!"

"はい!...すみません"

エルフが家畜に転落して以来、エルフ[家畜]が人間に少しでも損害を与えることは重大な反逆行為とみなされる。

飼い主である人間に1分を抜いた罪、家畜エルフには[懲罰部屋30日刑]を与えてもおかしくない。

その点、お尻100発の体罰を与えたのは、人間にしてはエルフにかなり慈悲深い方なのだ。

そんな慈悲にもかかわらず、リアが主人に敢えて事情を訴えたのは、リアがまだ家畜化されて間もないエルフだからだろう。

足を組み、手で膝を掴んだ後、

大きなお尻を人の目につくところに出す。

パンパンに膨れ上がった赤いお尻を突き出すリア。元々大きなお尻のむくみによって、ふくらはぎの3倍は大きく見える。

彼女は小さな震えとともに、細い背中の後ろを振り返り、公務員を見上げた。

"ご主人様。家畜のお題に遅れました...ごめんなさい...。厳しいお尻150回のお仕置き...ありがたく頂戴します!!!"

「メンテナンス」を兼ねるから、殴られるたびにエルフ服従条約を覚えるように"

"わかりました。"

袖をまくり、手首につけた金色の時計を外した公務員。今回の体罰は手のひらで行われるようだ。

理不尽な体罰に慣れ親しんだ社会とはいえ、エルフにとってお尻の体罰は常に苦痛で恐ろしいものである。

人々の厳しい視線が集まった赤いお尻が、怯えながら納得のいかない審判を待つ。

リアはすぐにでも頭を下げて目を閉じたかったが、家畜であるエルフはお尻の体罰を受ける時、恥ずかしさで顔を隠すことも、体罰者を見捨てる権利もない。

リーアは、手打ちをする主人に向かって、恐れとともに敬意を表さなければならなかった。それがエルフに許された行動、つまり礼儀だからだ。

公務員がこれに満足すると、リアの左のお尻をポンポン叩きました、

リアはそのお尻を、主人が殴りやすいようにそっと突き出した。

カチッ!

すでに手のひら跡が蔓延している左のお尻に手のひら跡を重ねる。廊下に破裂音が響き渡り、急所を突かれたリアからどうしようもない悲鳴が響き渡る。

ひ、ひゃっ!?

大きなお尻に比べ小柄なふくらはぎが揺れ、お尻が床に向かって一瞬下がった。しかし、愕然としたリアはすぐにお尻を主人に戻した。痛いと言って長時間お尻を主人に下ろすと、逆らう意思として扱われ、取り返しのつかないことになる。

下から上に急いで上げる姿は、まるでお尻で体罰に対するととても丁寧な挨拶をしているようだった。リア本人がそれを心から感謝しているかどうかはわからないが。

「ハ、ハナ！ ありがとうございます[エルフ服従条約]は...エルフが...家畜としての本分を忘れないようにするための条約なのです

ピンチ

"ほっ、うう..."

リアが礼儀正しくお尻を持ち上げたにもかかわらず、公務員は再びリアを責め、お尻をつまむ。

"家畜だから、もう数も数えられないのか？ お尻は両側を叩かないといけないことを知らないのか？"

家畜の尻が人間の尻と同じように扱われるはずがない。エルフにとって尻を叩くとは、両頬を一回ずつ叩くことである。

これに釣られたかのように、周りの観客もリアを笑う。

"ふふふ、こんな雌犬がかつて歴史を支配していたなんて!"

"公務員の方、鞭で肛門を叩いた方がよさそうですが!"

恥と理不尽の怒りに唇を噛み締めるリア。 それを知ってか知らずか、一発の殴打でリアの尻肉はエルフのプライドを知らずに暴れまわる。 公務員がその反抗的で熱いお尻の肉を掴んでつまみ、罪を問い詰める。

"はい...最初から...もう一度お願いします"

リアは細い脚を煽り、左のお尻を再び上に出して--。

ピタッ!

"フフッ!"

エルフとして受ける尻の痛みに耐えながら、容赦なく再び走ってくる右鷹のために、右尻をスルスルと叩きやすいように待機させた。

チャアック!

「ヒック...ハ...ハナ![エルフ服従条約]は...エルフが家畜としての本分を忘れないようにするための条約なのです

"数を数えるのは苦手でも、お尻を叩くのは得意なんだな、家畜らしくね。

[エルフの衣装]

エルフは家畜なので、人間に完全服従の意思を示さなければならない。そのための第一歩が服装の規範を守ることである。

1) エルフは必ず犬の首輪を着用する。エルフ用の首輪はエルフの神聖力を大幅に抑制する効果があり、エルフが人間に立ち向かう機会さえも遮断する。

2) エルフは人間に服従心を示す服装をしなければならない。そのような服装は必ずエルフにとって恥ずべき服装でなければならない。

そのため、エルフの服装ルールは、エルフの乳首と大陰唇だけを覆い、残りの身体を覆わない衣装の形でなければならない。このとき、長い手袋やストッキング、肩の薄い布などは許される。

3) 社会の公序良俗のため、エルフの陰唇と乳首を外に出してはならない。もし露出した場合、その場で200回以下のお尻の体罰を与えることができる。もしエルフの胸が服より大きかったり、行動が激しくなって誤って乳首やオマンユが飛び出したとしても、体罰を受けなければならない。人間が故意に服を脱いで乳首やオマンユが露出したとしても、それはエルフの行動態度が悪いのだ。とし、100回以下の

お尻の体罰を与えることができる。

[お尻の挨拶]

エルフは人間と対面したら、すぐにお尻を振って自分の名前と識別番号を書かなければならない。お尻はなるべく対面する人間の鼠径部の位置に置かなければならない。

お尻で名前を書いた後、「こんにちはご主人様、[識別番号]番のエルフ[名前]です」と叫ぶ。

その後、人間様がお尻を振るエルフを通り過ぎるか、エルフのお尻を豪快に叩くことでエルフの挨拶が終了する。

もし上記の場合でない場合、エルフはお尻を最初からもう一度振ってお尻の挨拶をしなければならない。

礼儀作法に違反したことが発覚したエルフは、不服従の意思があるとみなす。すぐに[懲罰部屋1週間]以上の処罰を受けることができる。

[エルフのお尻の体罰]

エルフにとってお尻は身体の急所である。痛覚神経が集まっているだけでなく、エルフが女神として神性を発揮できるようにする神聖な力の貯蔵庫でもある。

エルフの尻を適度な力で一発叩くだけで、彼女たちは痛みに悶絶するのはもちろん、30分から1時間ほどは神聖力を使うことができない。

痛みとは別に、多くの人の前でお尻を突き出し、体罰を受ける行為は、かつて人間の上に君臨していたエルフにとって、極度の恥辱を与える。

こうして人間は古代エルフの時代をお尻の体罰で締めくくり、それ以来現代までエルフのお尻を叩く。

[体罰マナー]

エルフが罰を受ける際に守るべき行動の作法を地域によって、組織によって数十から数百種類ある。どれもエルフにとって不合理で屈辱的な方法であることだけは間違いないだろう。これまでに見た体罰の作法は大きく分けて5つある。

- 1) お尻を手で殴られるとき、左右の頬を殴られるように扱う。これを守らない場合は、最初からもう一度罰を受ける。
- 2) [お尻の準備]というもので、主人がエルフのお尻を叩くとき、お尻を叩きやすいように主人の手に近づけることである。[お尻の準備]ができていない状態で罰を受ける行為は、人間に対する反抗意思として扱われる可能性があり、エルフには大きな注意が必要である。
- 3) ご主人がエルフに「お尻」を叫んだり、叱ったりしたら、すぐにお尻の体罰を準備する。お尻を人の多い場所に出す必要があり、周囲に人がいない場合は飼い主さんだけなら飼い主さんの鼠径部の方向にお尻を出す。

パンティーはお尻を出したらすぐに太ももまで下げて、オマンコとアナルが見えるようにする。ただし、今回のリアの体罰は公共の場である市役所で行われたため、パンティーまでは脱がさなかった。

「お尻」、または叱られたのにエルフが3秒以内にお尻を出さなかった場合、50以下の罰ゲームが追加されることがある。叱ったのにエルフがすぐにお尻を出さなかった場合、エルフがそれを自分にしたことではないと考えたり、叱られたことではないと判断して[懲罰部屋1週間刑]に処することができる。

エルフが人の多いところ、あるいは主人の鼠径部方向ではなく、 엉뚱한ところにお尻を出すと、エルフ自身が正しい方向にお尻を出すまでお尻をつまみ、体罰の回数を2倍に加重する。

4) エルフがお尻を叩かれる時は、お尻を突き出したまま頭を後ろに向け、叩く主人を見上げなければならない。これは、お尻を叩かれる前後のエルフの顔を飼い主に見せることで、家畜であるエルフが飼い主にどれだけ痛い罰を受けているのかを示すためである。エルフが体罰の痛みで長時間頭を下げた場合、体罰を最初からやり直すことができる。

5) お尻を叩かれたら、エルフがその回数を数え、「ありがとうございます」などの挨拶をする。

チャアック!

「ヒック...ハ...ハナ![エルフ服従条約]は...エルフが家畜としての本分を忘れないようにするための条約なのです

"数を数えるのは下手でも、尻を叩くのは得意なんだな、家畜らしくね。

"へうっ...はあ...はあ..."

やっとの思いで「殴られた」リア。 ご主人の厳しい手加減は、「エルフ管理部公務員」としてのキャリアを伺わせる。リアは痛みで尻を震わせながらも必死に「お尻の準備」をする。

リアは再び左腰を傾けてご主人様の手に近づけ、お仕置きをするご主人様を見上げ、哀れな瞳を輝かせます。

ピタッ!

"はあ————"

リアは右のお尻を必死にシュシュさせて-

パカッ!

「フッフ！ ドゥウル！ 私たちエルフは.....人類に迷惑をかけた魔女なのだから古代の過ちを常に反省しなければなりません！」

"顔を真っ直ぐ向け"

"はい、ネット..."

"笑" "怖い顔してますね"

パァン!

相棒!

"ううっ！ 三人！ 人間様は。私たちエルフのためにありがたいことに、私たちを家畜にしてくれたのです！ "

"今、お尻を下げたでしょ？ 尻を叩かれたくないってこと？"

「あ、いえいえ！ さ、悪いから。ありがとうございます。

"[準備]直立しろ。お前のような大きなお尻の牛を叩くのは大変だな。

"はい...ふふっ!"

カチッ!

ピタッ!

"...ねっ！私たち家畜エルフは、常に主人である人間を主人として仕え、奉仕し...与える罰を喜んで受けなければなりません！"

「そうそう、お前のような耳の長い豚どもは

ピタッ!

"クソッ!"

パンッ!

"殴られなきゃ気がすまない"

"ふふっ!五！私たちがエルフは...人間さんに少し似ているけど。牛や豚以下の家畜なので平等な扱いを望んではいけません!"

"ケツの穴を開けないで...許可したことないよ。もともとこれも罰金追加なんだけど、許してくれるんだろ？

"罪、ごめんなさい...ケツ穴を閉じます。"

チャアック!

カチッ!

「よ、シックス！ 私たちの行動は全て管理人様の許可が必要です！.....お尻の穴をひるがえすことさえも、許可がないとダメです

"それを思い出して、そんなに怯えるのか？ 不気味な家畜女が.....!"

パンッ!

パァン!

「七！ふふっ、人間様の指示がなくても。私たち家畜エルフは、人間様に最大限の奉仕と献身を提供します!"

「声を大きくしろよ、乳と尻を除けば小娘の声も小さいな。周りの家畜[エルフ]ピッチも全部聞いて気をつけろよ。え？

「はい！ ...人間様の指示がなくても、私たち家畜エルフは人間様に最大限の奉仕と献身を提供します！」

「そうそう、それがお前らの家畜の-」

カチッ!

"存在意義だ!"

ピタッ!

「エイト！！ アフ.....どんな.....理由.....?でも人間様がお仕置きしてくれたら心から反省して.....感謝して受け止めなければなりません

お相手!

"おい、また声が小さくなったぞ。 142台残ってるけど、これ倍増しようか？

あ、いえいえ！本当に頑張ります！エイト！！どんな理由であれ、人間様が罰を与えたら、心から反省し、感謝して受けなければなりません！」!

"ここは家畜がたくさん働いているところだよ。 君が最初のメンテナンスをきちんとやってくれないと、子供たちの面倒を見られないだろ?"

"あぶない。ふう。はい..."

チャアック!

お相手!

"あほっ！人間のいないところでも...。服装の規則を守り、絶対に首輪を外してはいけません。エルフの耳を隠してはいけません!

"あーあ.....尻が重くて叩くのも大変だな。 終わってからアフターサービスしっかりしろよ。"

"吸..ふ..ふ..。満足のいくサービスをさせていただきます。

カチッ!

パンッ!

"熱！！上記のエルフ服従条約に反する行動をした家畜は...いつでも[処分]される可能性があります！"

"あと140台だ。尻尾をひるがえすこと以外はうまくいってるんだから、しっかりしろよ。声を大きくして、涙を拭け。【服従条約】最初から。行くか？

"あ、はい!ふふっ。ありがとうございます！"

カチッ!

カチッ!

"十一!【エルフ服従条約】はエルフが家畜としての本分を...."

.....

【エルフ服従条約】 - 人間社会に通用する人間社会エルフの核心原理である。地域や組織によってエルフに対する扱いの度合いは異なるが、以下の条約は普遍的である。

なぜなら、この条約はエルフを従属させる際にエルフの女王に直接命じた条約だからだ。女王の肛門にペンを刺して下の条約を作成した後、お尻を叩かれた後、署名までしたという伝説がある。

一つ。【エルフ服従条約】は、エルフが家畜としての本分を忘れないようにするための条約である。

二つ。エルフは古代人類の歴史の暴君であり、人類に迷惑をかけた魔女である。エルフはこのような古代の過ちを果てしなく反省しなければならない。

三。人間[主人]様はエルフを善良にし、矯正させるために毎日罰を与え、家畜として飼っているのだから、常に感謝しなければならない。

四。家畜として人間社会に編入されたエルフは、常に人間を主人として仕え、奉仕し、与えられる罰を

喜んで受けなければならない。

五。エルフは人間の姿に似ているが、牛や犬以下の家畜生物であり、敢えて人間[主人]と同等の扱いを求めてはならない。

六。エルフのすべての行動には、管理してくださる人間[主人]の許可が必要です。ケツの穴をくり抜くことさえも事前に許可を得なければならない。

七。人間[主人]が特に指示がなくても、エルフは人間様に最大限の奉仕と献身を提供しなければならない。

八。どんな理由であれ、人間[主人]が罰を与えたら、心から反省し、罰を実行する。

九。人間[主人]がいない場所でも、エルフの服装規則に合った衣装を着用し、首輪を緩めたり、エルフの耳を覆ってはならない。

熱。上記のエルフ服従条約に反する行動をしたエルフの処分は、人間が自由にできる。

[メンテナンス]

エルフが悪いことをしたかどうかに関わらず、朝の業務開始前、または業務終了前に無条件でエルフに行う【管理】的体罰である。

お尻やアナルを手や鞭などで叩きながら、上記の「エルフ服従条約」を一つずつ覚えさせる。

これにより、エルフ自身が日常的に自分の家畜の身分をより一層自覚させるのである。

.....

ピタッ!

チャアック!

「百四十...六! 私たちの全ての行動には...ご主人の許可が必要です。ご主人様の許可が必要です!

お尻の穴をくねらせるのも……。許可がないとダメです！”

ピンチ

"へえ————"

掴んだリアのお尻の肉は無数の手のひら跡で塗りつぶされて真っ黒だった。

体罰を見物していた人たちも3回目くらいにリセットされる頃には、もう誰もいなくなり、リアと主人だけが残った。

道端でエルフを体罰することくらい、それほど珍しいことではなかったからだ。

やっとの思いで主人を振り返るリアの表情は、半ば呆然としている。

"ふうー[146台]ってなんだよ、今回で何回目のリセットなんだよ、殴られながらおしっこ、母乳垂れ流し、お漏らし、お尻の底に落とす..."

"だ、5回目です。"

"今回も正直リセットするようなことが何度もあったのを見てくれたでしょ？ 市庁舎のエルフ[家畜]を集めて連帯責任でアヒル歩きでもさせようか？"

"いいえ...教育しっかり受けます。"

"リアヤ"

驚きの表情を浮かべるエルフ、リア。

今までお尻を出すために膝に当てた手をお尻に当て、パンティーを下ろして肛門を広げて[浣腸]した。

"6178番の家畜エルフリアです!"

大きく開いた肛門が激しく痙攣する。腫れ上がったお尻を両手で掴む痛みによるものだった。

「[懲罰室]でずっと殴られ続けて、私が早期出所させたんだろ。昔、人に神聖力まで使うほど反抗的なお前が私じゃなかったら、そこから出られたか？

今頃、アナルで手押し車してるんだらうな。"

"はい...それは本当にありがとうございました"

"気を遣ってくれたら頑張ろうぜ。他の家畜[エルフ]はみんなおとなしく150台も耐えられないのか、え？

"是正します。"

"朝の体罰はここまでして、[お礼]次にアフターサービスでもやってみろ"

"あ、はい！"

リアは予想外の同情と好意に顔を赤らめる。

【お礼の言葉】とは本来、浣腸の姿勢を解いて体罰の姿勢でお尻で「ありがとうございます」と書くものですが、リアは突然の好意に驚き、肛門を開けたままお尻で「ありがとうございます」と書いてしまいました。

"教.育.感...サ...合...ニ。だ

肛門を膨らませ、オマンコを飛び散らせ、醜く感謝の意を表した。そこには古代のエルフはどこにもなく、現代の「家畜」だけが残っていた。